日本共産党
各務原市議団

ローマ教皇 核兵器「抑止力」を正面から否定
日本政府は核兵器禁止条約に参加を

２年前、各務原市議会に、「日本政府に核兵器禁止条約の調印を求める意見書」の提出を求める請願が出されましたが、19対４で否決されました。否決の理由は「核保有国と非核保有国との橋渡しをしながら、核兵器の廃絶を目指す極めて現実的な対応だ」と、政府の言い分通りの反対討論でした。12月議会にも同様の請願が提出されました。

今回は、ローマ・カトリック教会のフランシスコ教皇が来日し「核兵器廃絶への力強い決意を」発信されました。「心から声をあわせて叫びましょう。戦争はもういらない！　兵器のごう音はもういらない！　こんな苦しみはもういらない！」と。

心ある議員なら心を打たれ、賢明な判断がされるはずです。

教皇は、広島・長崎市を訪れ、「核兵器についてのメッセージ」を読み上げました。禁止条約を含めた核兵器廃絶への決意を表明。世界の政治指導者にむけて、「核兵器は、国家の、安全保障への脅威からわたしたちを守ってくれるものではない、そう心に刻んでください」と訴えました。

長崎を「核兵器が人道的にも環境にも悲劇的な結末をもたらすことの証人である町です」と表現。武器の製造、改良、維持などに財が費やされ、「日ごと武器は、いっそう破壊的になっています。これらは途方もないテロ行為です」と断じました。

核兵器が人類にもたらした惨禍を、真正面から受け止めて、核廃絶への決意を表明されました。核兵器は私たちを守るものではないと核抑止論を明確に否定されています。核兵器禁止条約の実現に向けた「不退転の決意」を述べられ、心が揺り動かされました。

教皇のかたわらには、原爆投下後の長崎で撮影されたとされる「焼き場に立つ少年」の写真パネルが掲示されました。教皇はこの写真を２０１７年の年末、自らの署名と「戦争がもたらすもの」というメッセージを添えて、教会関係者に配布しました。どんな言葉よりも雄弁なこの写真を皆で分かち合いたいと思ったのだといいます。

「焼き場に　立つ少年」

報道写真家 ジョー・オダネル氏撮影
（1945年 長崎の爆心地にて）

佐世保から長崎に入った私は、小高い丘の上から 下を眺めていました。すると、白いマスクをかけた男達が目に入りました。男達は、60センチ程の深さにえぐった穴のそばで、作業をしていました。荷車に山積みにした死体を、石灰の燃える穴の中に、次々と入れていたのです。

10歳ぐらいの少年が、歩いてくるのが目に留まりました。おんぶひもをたすきにかけて、幼子を背中に背負っています。弟や妹をおんぶしたまま、広っぱで遊んでいる子供の姿は、当時の日本でよく目にする光景でした。しかし、この少年の様子は、はっきりと違っています。重大な目的を持ってこの焼き場にやってきたという、強い意志が感じられました。しかも裸足です。少年は、焼き場のふちまで来ると、硬い表情で、目を凝らして立ち尽くしています。背中の赤ん坊は、ぐっすり眠っているのか、首を後ろにのけぞらせたままです。

少年は焼き場のふちに、5 分か10 分、立っていたでしょうか。白いマスクの男達がおもむろに近づき、ゆっくりとおんぶひもを解き始めました。この時私は、背中の幼子が既に死んでいる事に、初めて気付いたのです。男達は、幼子の手と足を持つと、ゆっくりと葬るように、焼き場の熱い灰の上に横たえました。

まず幼い肉体が火に溶ける、ジューという音がしました。それから、まばゆい程の炎が、さっと舞い立ちました。真っ赤な夕日のような炎は、直立不動の少年のまだあどけない頬を、赤く照らしまし た。その時です。炎を食い入るように見つめる少年の唇に、血がにじんでいるのに気が付いたのは。少年が、あまりきつく噛み締めている為、唇の血は流れる事もなく、ただ少年の下唇に、赤くにじんでいました。

夕日のような炎が静まると、少年はくるりときびすを返し、沈黙のまま、焼き場を去っていきました。

水脈 読者版
水脈読者版　第２２６号
2019年11月28日発行／日本共産党各務原市議ハタノこうめ、ながやてる子
各務原市川島小網町2144-55　TEL 0586-89-3924　携帯090-9947-4988